

三方原・都田

～歴史を感じて・・・まち歩き ガイドマップ～

発行 浜松北地域まちづくり協議会
 問合せ先 090-4233-8298

滝沢展望台から 都田・三方原を望む

■三方原地区

三方原は、磐田家とともに伊豆越(100万年～1万年)に天竜川からの堆積された土砂が隆起した土地で、洪積台地と言われている。台地の土には大きな川がなく、本格的な開拓が始まったのは明治時代。

江戸時代は柿地村、祝田村、都田村の三つの村の採草場であったために、「三方原の村」から「三方原」と呼ばれるようになり、現在の呼び名は「三方原」。

明治2年頃から入植した土族の開拓が始まり、道路を作り井戸を掘り生活を定めたが、経験のない開拓事業に失敗した。大正3年に元城・金指間に新幹線が開通し、戦後の昭和の開拓も三方原用水の完成を経て農業・産業の発展へと繋がった。

道のない三方原台地は工場の高台移動が進み、工場地帯に変わり開拓当時の風物は少なくなった。

■都田地区

昭和40年(1965)から土地区画整理事業(テクノポリス構想)が始まり、この開発で歴史文化財の発掘調査がされ、たくさんの新しい発見があった。

都田地区内から発掘される石器や土器は新石器時代(今から1万年)のものが多く、この時代から人が住んでいたことがわかる。「川山道跡」からは大量の石斧や石の鍬・土器の破片が発掘され、この道跡で石器や土器を地産地消へ提供し、同じものが都田川沿いで見つかる。川山道跡は伊豆国道支線、開拓のため埋め立てられた。「京田(みやこだ)」と書かれた千年以上の木の木簡も見つかり、たくさんの道跡が残る地域である。

新東名の開通後、第3都田工場用地の分譲が始まり、先端技術集積地として整備が進んでいる。



① <三方原神社>
 大正7年(1922)浜松市内に祀られていた東照宮(元城神社)を譲渡村社とし、昭和29年に三方原村が浜松市と合併し、31年に三方原神社と改めた。磐田家康とともに徳川家光が合祀されている。境内には気貫林跡・三方原小学校発祥の碑・扶持米倉跡等がある。

① <気貫林(りん)>
 地元地産の蘭草(いんげ)を江戸で売り、豊後豊前として成り立。その財で800戸の開拓の足掛かりとなれや茶圃の開拓に尽力した。百里園長として30haの茶圃の育成と製茶工場の新設を成功させた。



② <百里園跡> 気貫林が浜名湖の豊饒の事業で開いた跡をすべて、三方原の開拓に費した。保田保ととも百里園を行き、お茶のうなが百里であったという。工場は全園跡は明治24年頃で、茶室面積は10町畝、建物坪数約50坪と記録に残る。三方原にとって一大産業として名を残した。

④ <中道(なかつち)>
 笠原道と平行に作られた道で入植した土族800戸の生活の中心道路に「中道」という名がつけられた。「中道」の名を知る人は、ごく少数となった。

⑤ <保道(たもつち)>
 横田保は現在の浜北区内野の人。当時百里園の経営に内野の自宅から毎日乗るの難い道に保道と名づけられた。

⑥ <赤松道>
 笠原道の大谷南野上から三方原台地の東端に近い赤松へ通じる道。



⑧ <四所神社>
 前立は天明の頃(1781-82)といわれ元は安楽寺大日堂の建物を「四所」と呼ばれていたが、滝沢小学校敷地になった時に現在の場所に遷した。元形は作像・造像を創つ特殊神事の「シシ打神事」が行われる。

⑨ <林慶寺>
 滝沢町にあった安楽寺・普賢寺・泉蔵寺の三カ寺が明治の初めに林慶寺に併合し、滝沢町・滝沢町で現存する唯一の寺。創立は寛永2年(1625)で現住僧は22代目。江戸時代には寺子屋、明治4年には小学校、奉斎場としても使われ、地域の文化を担ってきた。昔からの祭を伝承し、「滝沢のおくなくい」の祭典が行われる。



⑫ <平八郎神社>
 西光聖徳の神。都田川の河川改修で段丘に祀られた。白狐の伝説があり、善清寺(伝説)の北山脚の穴に祀られている。車返祭は地区固有の祭典。



⑬ <仙巖の滝>
 滝沢キャンプ場近くの滝。高松市赤松町から光復橋南側に遊ばれている。深淵を眺めながら歩くのが自然を堪能できる。昔、牛が滝底に落ちて死んだことがあり地元の人には「牛淵」とも言う。



⑭ <瀬川神社>
 「瀬川の上の山付村に瀬川神社があった」と言う人がいる。発掘調査がされていないため詳細は不明。敷のようなもので、以前には石籠も残っていたという。瀬川神社の内宮跡でもあり、当地の人がお祈りしている。



⑮ <都田古兵衛>
 森の石松を編み討ちしたことで有名な都田古兵衛の御遺徳の尊厳と祈が刻まれている。

⑯ <龍淵寺>
 創立は天正16年(1588年)の豊臣時代。徳川家康の家臣、近藤家の菩提寺で本堂の裏手には近藤氏の五五印が刻まれている。お寺の瓦はすべて近藤家の家紋「龍の角」となっている。



⑥ <治分一里塚>
 本道とテクノロードとの交差点から三方原台分一里塚の跡にある。一里塚で江戸から6里は、近くには一里塚も残る。

⑦ <三方原道分>
 善徳と奥山半信の里塚がある。道標には「石みやこ」の中かたが「石みやこ」である。聖徳石の遺構には奥山半信の石塚三里九丁とある。

⑧ <東大上一里塚>
 両側に塚と数跡が残る。東大上一里塚で江戸から7里目の塚になる。三方原台地の開拓の地とされている。

⑨ <権役塚跡>
 昔ここに権役塚と呼ばれていたが、明治の初め、この地に入植した農家にちがひ徳川家康を祭神としたものである。

⑩ <精鏡塚 本乗寺>
 三方原台地の戦死者を祀った所。「道川軍の本陣跡」と推測する説もある。この精鏡塚は三方原で一番古い寺「本乗寺」の境内に安置され、「塚供養」と書かれた「石供養」が今も残されている。

⑪ <三方原の戦い>
 武田軍は三方原を通過し、三河方面に進軍するのを見た徳川軍が武田軍の行軍を阻むとした。待ち伏せで、武田軍の攻撃を受けた。元禄3年(1672)12月22日の夕刻に始まった戦いは2時間程で決着がつき、多数の死者・負傷者を出した徳川軍は浜松城に逃げ帰った。現在、三方原遺跡に碑があるが、主戦場は本陣の陣(精鏡塚)の南、現在はないが、この本陣を中心に戦ったといわれる。精鏡塚が移転する前は北の北石山にあった。



⑫ <土族原教団>
 明治の初めに約800戸の土族が入植したが、なれない開拓はなかなか成功せず離散が相次いだ。土族で結んだ教団はここに残る。

⑬ <三方原教団跡碑>
 明治10年に気貫林が開拓生活困難者を救うために開設し、福祉事業の先駆者となすもので、気貫林没後は横田神社に受け継がれ、明治30年頃まで続いた。

⑭ <気貫門跡>
 三方原開拓の先駆者、気貫林が開拓を構えた開拓の跡。一部が築井町の山山寺に移築され利を変えて現存。

⑮ <経道都田口駅跡>
 経道前には都田口駅跡には本は一軒もなく、乗降車と言えは都田本村の人々が主で、駅名は都田口駅。国鉄二俣線が開通し、都田口駅ができた。経道が歩かずに都田口駅に改称し、駅名に都田の入口と書くと意味が口の名が付けられた。

⑯ <夢見の床>
 都田川に流れる木製の橋で、橋の組手の美観が認められ「ふるさと手作りの木工」を受け、浜北へ運ばれる。付近に渡した大小の石が多いことから、この名がつけられたらしい。

⑰ <枕湯橋>
 都田川に流れる木製の橋で、橋の組手の美観が認められ「ふるさと手作りの木工」を受け、浜北へ運ばれる。付近に渡した大小の石が多いことから、この名がつけられたらしい。

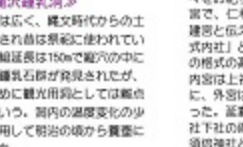
⑱ <須賀神社>
 大塚大前神社はじり日本武尊、神武天皇、菅原理直、直良・直経・都田神宮阿母神など70社の神々を祀りする大塚大前神社。神宮で、仁和3年(1881年)の建立と伝えられている。「富貴内社」として奈良時代からの格式の高い神社。内宮は上社として須賀の上の山に、外宮は下社として中津にあった。延喜2年(902年)上社下社の両社を現在地に遷した。須賀神社とすようになった。



⑲ <滝沢鍾乳洞>
 洞窟の中は広く、縄文時代からの土器が発見される前は洞窟に使われていた。洞の延長は18mで洞窟の中心に赤い土層が発見されたが、洞内のため日光が照りこむことは少ない。洞内の湿度変化の少なさを利用して明治の頃から養蚕に利用された。



⑳ <前原銅鐙>
 テクノポリス開発工事に発見された銅鐙となった。定額賦税が確保できる銅鐙時代後期のものと推定される。



㉑ <見巻3号古墳>
 6世紀後半の円墳でこの時代のものとしては大きい方である。古墳は4基の古墳群があり、完全な形で残っているのはこの3号墳のみとなった。周りに約3.5mの溝が掘られていたと推測される。平成4年発掘調査で定額賦税となった。



⑲ <信玄街道跡>
 有玉寺町付近の穴下から三方原台地へ駆け上り、川山道跡に合流する道が「信玄街道」と書かれている。道分で大休止を取つたと伝えられる。



㉒ <見巻山古墳>
 「7世紀初頭の円墳で、直径11m、高さ1m～2.5mあり、ほぼ完全な形で残されている。都田町長が市長であるのと同じく、昭和5年浜松市指定遺跡となった。

